

海獣観察産業の発展条件

宇仁 義和 [斜里町立知床博物館／学芸員]

背景・目的

ホエールウォッチングやイルカ観察、アザラシ観察などの海獣観察サービスは、新たな地域産業として注目を集めており、観光立県をめざす北海道において期待される産業でもある。しかしながら、日本では海獣類や観察事業に関する法令の整備が少なく、漁業との調整や対象動物への接近について問題が発生していると考えられる。そこで、海洋資源の非消費的な資源利用である北海道沿岸の海獣観察サービス業について、健全に発展していくための条件整備について、観察産業の実態から考察し、具体的提言を行う。

内容・方法

調査内容は、聞き取りと実態調査、資料調査を実施した。実態調査では、海獣観察サービスに実際に参加して、(1)観察可能動物と実際の観察結果、(2)動物への配慮などの操業状態、(3)レクチャーやアナウンスの内容、(4)観察の阻害、の4つを筆記およびビデオで記録し、求められる法的・行政的な対策を考察した。有料サービスは実施されていないが、海獣観察が可能な場所についても海獣観察を行い、事業化の可能性を考察した。聞き取りでは、観察事業者からは事業の歴史、海獣研究者からは観察事例、北海道水産林務部からは漁業調整規則について行った。資料調査は、過去の実態観察場所として知られた場所を抽出した。加えて、充実した海獣生態調査体制と法制度によって海獣観察産業が確立された北米との比較調査を行った。北米との比較では文献とインターネットを研究素材とした。

なお、海獣観察サービスへの参加・参画は補助金による研究以外の調査も実施した。

結果・成果

有料サービスへの参加は、補助金によるもの6件、それ以外のもの5件の合計11件参加した。対象動物による内訳は、クジラ・イルカ2、アザラシ2、鯨類と鰐脚類の複合3、一般観光船等4であった。

有料サービスのうち、観察可能動物とした種がまったく現れなかったサービスはなく、数の多少や遠近の違いはあるものの、宣伝どおりの観察結果が得られた。しかし、7千円という金額でミンククジラ数頭が遠くに見えただけのケースでは、乗客は落胆している様子だった。一方、知床博物館で実施した観察会では観察動物は少数だったが、シャチが間近に現れ

たため参加者の満足度は大きかった。また1400円と比較的安価な小型観察船でのアザラシ観察では、接近のため一旦逃避したアザラシが停船後に再上陸し約70頭が比較的近距离で寝そべるなど自然な姿を見せたため、1時間近く飽きずに観察が続いた。

大型観光船などでは海獣の観察は可能な場合もあるとしており、乗船時には観察はできなかった。流水観察ヘリコプターにも搭乗し、カナダなどで実施されている空からのアザラシ観察の可能性を探ったが、飛行時間が1分30秒と極めて短時間で観察には至らなかったが、可能性はあるものと考えられた。

事前レクチャーや科学的解説を実施していたのはホエールウォッチング・ボートの2件であった。とくに鯨類の研究者が乗り込んでいたケースの充実が目立った。一方、複合動物が可能な観察船は解説が無かったが、これはアマチュアカメラマンが主な乗客のためと考えられた。なお、これらのボートはワシ類も観察対象にしているが、被写体を近づけるために魚を氷上にまくなどの餌付け行為を行っていた。

観察サービスの阻害要因として最も大きなものはイルカ漁業やトド・アザラシ猟と考えられた。これらの活動は観察対象そのものの追い払いにつながり、たった1隻の狩猟用船外機船の航行のためアザラシの観察が皆無になった事例に遭遇した。また今年からミンククジラを対象にした沿岸での調査捕鯨が開始される。今年度は9月に釧路沖、来年度は宮城県沖で実施される。同種は道内のホエールウォッチングの主要な対象であり、捕鯨の継続や捕獲海域の拡大により、海獣観察産業の将来に影響を与えられと考えられた。

有料サービスは未実施だがアザラシ観察が可能な沿岸ではシーカヤックによる観察により近距离での観察ができた。シーカヤックの対象地域の魅力の一つとして宣伝可能と考えられた。

今後の展望

この研究期間中に独自に実施した自然観察会で、知床半島斜里側でツチクジラとシャチの観察ができた。これらの鯨類が観察船などで観察されたのは初めてであり、航路の選択によってこの海域でのホエールウォッチングが期待できる証拠となった。今回の調査では道内各地の観察サービスを体験したことで知床海域の海獣観察事業の将来性を強く感じる事ができた。

今後は知床地域での具体的な事業化と支援策を提言していきたい。